実践報告

保養者養成校のピアノ授業における連弾学習の役割

―本学の授業実践を通した考察―

The Function of Piano Duo Learning in College of Childhood Education

齋　藤　亜都沙
SAITO, Azusa

キーワード：保育表現技術（音楽）、ピアノ連弾、アンサンブル

Ⅰ．研究の目的

保育者養成校の現状では、年々ピアノ初心者の割合が増加傾向にあることが多く報告されている。保育の現場に携わる際、子どもの音楽表現活動を支える音楽的素養を伴ったスキルの習得には多くの時間を要する状況にあるといえる。そのような状況下、筆者は授業実践の中で連弾学習に際し学生の著しい変化を見受けたことをきっかけに、連弾による学習効果と可能性についての模索を始めた。連弾は初級者の実力向上にとって非常に有効であり、音楽の核となる要素を効果的に訓練するにも最適であると考えられる。保育者養成校における連弾学習の役割について検討することによって学習内容の可能性を最大限に引き出し、今後の指導能率を上げることを目的に考察を進めることにする。

Ⅱ．先行研究と研究方法

保育者養成校における連弾に関する先行研究として、高木・稲葉ほか（2008）、若谷（2013）、田中（2015）、吉田（2017）が挙げられる。高木・稲葉ほかでは、連弾の導入によって「他者への意識」の習熟を促す効果を指摘し、保育者養成における重要性を論じている。[1] 若谷もまた、ペアにおける音楽表現活動がもつ共同的な学びの可能性について探り、連弾によって「他者の声を聴くこと」や「他者との繋がり」を学ぶことが、保育の音楽表現技術の習得に重要であると論じている。[2] 一方、田中は学生のモチベーションを向上させるような教材を用いたグループワーク＝連弾によって、表現を工夫して音楽を創り上げる楽しさや達成感を得る事が出来、連弾の実践によって学習意欲が向上するという結果を論じている。[3] 吉田はピアノ連弾の授業実践研究の結果、「音楽的能力の習得」「教育的効果」「学生のピアノに対する心境の変化」の３つの視点において有効な学習効果が得られたと論じている。[4] 本研究では、本学器楽関連授業において連弾に取り組む学生（２年次）のうち、筆者が担当するクラスの学生13名を対象に授業実践と質問紙を用いた調査を行う。そして先行研究による結果や授業実践によって導かれた連弾の学習効果に関する資料と研究対象者の実際とを比較し、連弾授業に関して再考していく。

こども教育宝仙大学　非常勤講師

Ⅲ．連弾による学習効果

連弾は18世紀末から19世紀にかけて行われたピアノの改良と共に急速に発展した演奏形態である。１台４手で第一奏者（伊：Primo）と第二奏者（伊：Secondo）によって演奏されるピアノ二重奏が一般的であるが、３人以上での６手連弾や８手連弾等も存在する。ピアノ１台でのアンサンブルを可能とする連弾は、その導入時において最も身近であり高い学習効果を得ることを望める手段である。サロンや裕福な家庭で楽しむための目的のほか、教育的目的も伴い普及したことから、ピアノ学習にとって有用な作品が多く存在する。

（1）連弾の学習効果に関する考察

連弾の学習効果に関して音楽専門家の立場から考察を行った。先行研究を念頭に授業の実践を通して考察した具体例を挙げる。連弾での学習効果として先ず初めに挙げられるのは音を聴く力の向上である。若谷が次の点「互いの音を聴く」、「聴いてどのようにすれば良くなるか考える」、「お互いの演奏について話し合う」を連弾学習の利点として挙げているように、音を聴く力を養う事は演奏において最も重要である。しかし初心者は指を動かす事のみに意識を集中させてしまう傾向にあり、自分の発

した音を「聴けていない」、もしくは「聴こえていない」という例が極めて多い。そこで連弾学習を取り入れることによって、相手のパートにも耳を傾け、互いの響きの調和を感じる体験を得る事によって聴く耳を養うことが期待出来る。次に高木ほかにおいて述べられているように、連弾による学びにおいて「他者への意識」が重要となる。相手と呼吸を合わせる感覚を養う事も「他者への意識」という項目に括られるだろう。相手の呼吸を感じ、読み取る力はアンサンブルにおいて非常に重要であるが、連弾では最も近距離で相手の呼吸を感じる事が出来るため、呼吸を合わせる訓練にとって最適な手段である。アインザッツ（音の出だしの合図）やテンポ・曲調等が変化する時は勿論、ペアワークでは音楽のフレーズを考え呼吸を合わせるという意識が強くなり、自然と音楽的呼吸の感覚が養われていく。また、田中が学生のモチベーションの向上にとって連弾が有効であるという結果を示しているように、他者と共に音楽をするアンサンブルにおいては、自己のパートへの責任感が増しソロに比べて意欲的に練習に励むようになり、授業実践の現場においても学生のモチベーションの向上が認められた。連弾による読譜力の向上という面で見ると、初級学生にとってより高度な領域に踏み込めるという点で効果が認められる。例えばセコンド・パートは両手共にヘ音記号である事も多く、ヘ音記号読みの訓練となる。逆にプリモ・パートでは高い音域の読譜訓練となる。また連弾は、個人の都合によって音楽の流れを止めずに楽譜の先読みをする意識が働く事によって初見力が向上し、更にソロに比べて充実したリズムやハーモニーに触れられることによってソルフェージュ力の育成も期待出来る。

(2) 音楽の三要素と連弾

音楽を構成する三要素であるメロディー（旋律）、ハーモニー（和声）、リズム（律動）の感性を養う為の学習としても連弾は有用である。第1要素のメロディーに対する連弾による学習効果として、主に主旋律を奏でるプリモ・パートは、伴奏に耳を傾けながらメロディーを表現する力を発達させ、主に伴奏型を担うセコンド・パートでは伴奏力の向上が期待できる。また主旋律の入れ替わりや、パートを跨いだ旋律線の受け渡しも連弾学習によって得られる音楽体験のひとつである。さらに、お互いの音のバランスや、音質、音量の調整に対しても効果的な学びの機会となる。第2要素のハーモニーに対する学習効果としては、鍵盤を広域にわたって使用する事によってソロでは体験出来ないような厚みのある豊かな響きを体験する事が出来る点が挙げられる。より幅広いハーモニーを体験することによって調性感覚を身につけることも期待でき、初級学生には有効な学習手段であると言える。第3要素のリズムに対する学習効果としては、自分の音と相手の音を縦の線で合わせ、安定したテンポで弾く意識が高まり効果的である。ソロ演奏では正しいリズムや拍子に対する意識を持てず、その重要性を学生が認識していない傾向にある。しかし連弾では、ひとつの音楽を成立させるためにパートナーとの拍子やリズムを合わせざるを得ない状況に置かれるため、音楽の流れを止めずに身体でリズムを感じながら弾き進めるための良い練習になる。

(3) 初心者学習に有用な連弾教材

ピアノ連弾の教材は純正に連弾曲として作曲された曲以外にも、有名な曲を様々な様式で編曲したものが数多く存在するが、初心者学習において「音楽の基礎を学ぶこと」を目的とする場合、先ずは整然とした古典の作品を用いて音楽のアゴーギクやデュナーミクの基本を学ぶ事が必須であると考える。教育的目的を伴った連弾作品から、音楽教育の導入に有用な教材としては以下を挙げる事が出来る。

① 保育者養成校や初心者の導入においてバイエル（Ferdinand Beyer 1806-1863）作曲の『バイエル ピアノ教則本』[5]《Vorschule im Klavierspiel Op.10》は使用頻度が高く、本学においても初心者にはバイエルの課題習得を課しており、学生にとって馴染みのある教則本である。この教則本の中には「先生と生徒による」とされる連弾曲があり、ひとりで弾くと退屈な面も連弾にする事でスケールの大きな響きを楽しめる。また、伴奏（Secondo）のリズムの刻みに合わせることによって、各音符の音価の違いも学ぶ事が出来る。ピアノ導入レベルにあっても初期段階から連弾で音楽の楽しみを経験する事が出来るという点から見ても有効に使われるべきである。

② 初心者と先生（ピアノ経験者）という組み合わせによる教材として、ディアベリ作曲の『ピアノ連弾のための28の旋律練習曲』が推奨されている。この曲集について児玉は、「旋律と伴奏というアンサンブル・スタイルでより深い音楽性を持った魅力的な作品であり、特徴としてはバイエルと同程度のテクニックでリズム・テンポ・強弱・調性・様式などのアンサンブル技術の基本を、より美しい音楽によって勉強する事が出来る。」と紹介している。[6]

Ⅳ. 連弾学習に関する質問紙調査

これまでの考察を元にして調査対象学生に連弾に関する質問紙調査を実施した。

（1）全設問と回答（学生による記述から抜粋）を以下にまとめる。

【問1】ひとりで演奏する時と連弾の時とでは、リズムやテンポに対する意識に変化はありますか？

（A）ある：13名　　（B）ない：0名

連弾では相手に気を使い、お互いに合わせようとする意識が働く。
ひとりで弾く時は自分の表現で所々ためたりするが、連弾の時はしっかりとリズムやテンポを守って弾いている。
独奏だと自分のテンポで進めようとするが、連弾では足を引っ張らないようにテンポを揃える事を心がけている。
連弾の時はペアの人に迷惑をかけてしまうから合わせている。
テンポを合わせないと綺麗なメロディーにならないため意識する。
相手のテンポに合わせてすらすら弾けるようによく練習している。

【問2】連弾を学ぶことによって音を聴くことに対する意識に対する変化はありますか？

（A）ある：13名　　（B）ない：0名

相手がどこを弾いているか、よく聴こうとする。
音が不協和音にならないように気をつける。
相手の音を意識して聴くようになった。
相手のパートも聴かないと、自分だけで走ってしまう部分があるからよく意識する。
自分の手だけでなく音に集中している気がする。

【問3】ペアで演奏する時、相手に対してどのような意識を持っていますか？

なるべく合わせようとしている。
迷惑をかけないようになるべく間違えないように気をつける。
迷惑をかけないように練習を倍するようになった。
相手の手の位置を意識している。
息を合わせられるように意識している。
間違えても弾き直さないように心がけている。

【問4】楽譜を読む時、独奏曲と連弾曲で何か違いを感じる事はありますか？

セコンドの場合、両手がヘ音記号の事が多いので譜面の読み間違えに気をつけている。
相手の音があって自分の音があるので、自分ひとりだとタイミングが分かりづらい。
ト音記号とヘ音記号がよく分かるようになった。
連弾の時は自分のパートにメロディーが無いときがあるため、両方の楽譜を読むようにしている。
タイミングを合わせること
楽譜を読むのが苦手で音を覚えて弾くからあまり変わらない。

【問5】連弾で音楽表現をする時、独奏の時とどのような違いを感じますか？

ひとりで表現する時は、曲の雰囲気に合わせて自由に表現する。連弾ではメロディー重視で表現して弾く。
迫力が違う。
音がたくさんあり、高い音と低い音を一気に感じられる。
高いパートでも華になるところとそうで無い所があるから、メロディーでない時は音を小さめにする様にしている。
相手のタイミングやリズムを活かすところ。
緊張感がある。

【問6】連弾の練習ではソロの時とモチベーションに変化はありますか？

（A）ある：9名　　（B）ない：4名

A 好きな曲を選べるから楽しく練習出来る。
A 相手がいるから足を引っ張らないように練習の気合いが増す。
A ソロのときより責任を強く感じプレッシャーがある。
A 出来たら楽しいし達成感がある。
B どちらも楽しいから

【問7】連弾に関する学習効果として思い当たる事や、連弾に関する自由回答を記述して下さい。

①弾く事だけに気を取られないように、他の音を聴くことで状況を知る事が出来ると思う。
②人と一緒にやる事で合わせて楽しめるところが良いと思う。
③リズムやタイミングを理解出来ました。
④音の聞き分けを意識するようになった。
⑤協調性
⑥ピアノがより楽しく感じる。
⑦連弾は楽しいから二人で演奏出来る場をもっと設けてほしい。

(2) 質問紙調査の結果と考察

今回の質問紙調査では、連弾の学習効果としての回答をより明確にすべく独奏時との比較を中心に問いを作成した。

【問1】では、リズムやテンポに対する学生の意識の変化の有無を調査した。その結果、調査対象学生の全員が「意識に変化がある」と回答し、リズムを正確に刻む事の重要性を認識させる良い機会となることが分かった。【問2】では、音を聴くことに対する意識の変化について調査した。こちらも問1と同様に全員が「意識に変化がある」と回答し、これまでの仮説を裏付ける結果となった。【問3】では、先行研究における「他者への意識」の観点から、ペアの相手に対してどのような意識を持っているか調査した。その結果、「相手の呼吸と合わせる」等の意見の他に、「相手に迷惑をかけないように練習を増やす」といった類いの回答が多く寄せられた。責任感の助長という面で社会性をも育む連弾の可能性が示された。【問4】では、読譜に関する調査を行った。先の章において、筆者は、音楽専門家の立場からみた、連弾によって期待出来る学習効果として初見力の向上やソルフェージュ能力の育成を挙げた。その点に関して学生が実感を得るには研究期間が短く、結果の証明には至らなかったが、音部記号の理解が深まったという声などが寄せられた。学生の楽譜を読む力の向上に向けて、連弾の効果的な導入を検討し指導を工夫することによって、より一層の効果を期待出来るだろう。【問5】では、音楽表現に関して調査を行った。「高いパートでも華になる所とそうで無い所があるから、メロディーでない時は音を小さめにする様にしている。」という意見は、音楽の三要素におけるメロディーと連弾の関係に記した「お互いの音のバランスや、音質、音量の調整に対しても効果的な学びの機会となる」と一致した。また同様に「音がたくさんあり、高い音と低い音を一気に感じられる」という意見は、ハーモニーと連弾の関係について記した「ソロでは感じられない厚みのある豊かな響きを体験出来る」という点と一致した。ペア学習によって音楽表現に対する意識や幅が広がる結果が示された。【問6】では、練習に対するモチベーションへの作用に関して調査を行った。ソロの時と練習意欲に変化があると答えた学生は9名、ないと答えたのは4名であった。ないと答えた学生の回答は「どちらも同じくらい楽しいから」等、ピアノ学習に対する前向きな意見であった。本学において連弾は幅広い選択肢の中から選曲をすることが出来るため、耳馴染みのある好きな曲を演奏出来るという点が学生のモチベーション向上に反映されていることが分かった。また問3の回答と重複するが、「相手に迷惑をかけたくない」という気持ちがモチベーション向上に繋がっているようである。【問7】では、連弾の学習効果に関する自由記述を実施した。比較して見ると、①・④は、「音をよく聴くこと」、②・⑥・⑦は「モチベーションへの作用」、③は「音楽要素に対する理解」、⑤は「他者への意識」と一致し、これまで挙げてきた連弾の学習効果の裏付けとなった。

Ⅴ．授業実践報告

研究対象：こども教育宝仙大学「器楽演習（応用）」を受講する学生13名（2年生）
調査期間：2017年9月20日から11月8日

(1) 調査対象者の学習状況

先にも述べたように、近年保育者養成校の学生の大半がピアノ入門レベルの初級者である現状が多く報告されている。葛西・伊藤ほか（2015）によると、本学においては4人に3人がピアノ初心者という状況にあり、その割合は年々増加傾向にある。[7] また本学においてピアノ演奏能力は「保育技術のひとつ」であると捉え、「幼児の音楽活動を支えるために必要なピアノ演奏の表現技術習得」を授業のねらいとして掲げている。1年次において初級者には本学教員により独自に選定されたバイエル課題の習得を課し、春学期に選定課題を終了出来なかった学生は秋学期に再履修となる。バイエル終了レベルの学生は、ブルグミュラー、ソナチネ、又はレベルに合った曲を適宜選曲し、学習を進めている。秋学期からは、ピアノ・ソロと並行して、本学が独自に選定した26曲の子どもの歌を中心にコードネームを用いた伴奏法や弾き歌いの学習に入る。2年次では、引き続きピアノ・ソロ、子どもの歌の弾き歌いの学習を進めると共に、ペアワークとして連弾、グループワークとして子どもの歌による合奏等アンサンブル力の育成を目指したカリキュラムとなっている。本学では1年次春学期の成績に基づき、秋学期からレベル別に分けられた4つのクラス編成により授業が行われている。2年次はそれを引き継いだクラス編成で、1クラスに対して6名から8名の学生を1人の担当教員が受け持つ体制となっている。

(2) 連弾の授業概要

連弾は各クラス内で組んだペアによって行われる。曲目の選定はクラス担当教員と相談の上、クラシックのみならず幅広いジャンルから学生の意思を尊重し選曲している。ソロではクラシック曲を中心に学んでいる事もあり、連弾では映画音楽や歌謡曲等を好んで選択するグループが多い傾向にあるが、より意欲的に取り組む様子が見られる。春学期、秋学期ともに、中間試験と期末試験が合同発表の場となる。

(3) 連弾の授業実践

授業：毎週水曜日90分レッスン（9月20日から11月1日までの計7回）

内容：秋学期中間試験前に授業回数は7回あり、連弾の指導はリハーサル日を含む第3回から第7回が充てられた。

発表：秋学期中間試験（8回目の授業）

開催日及び場所：2017年11月8日、こども教育宝仙大学音楽演習室

内容：進度別に分けられた4クラス合同による連弾と合奏の発表。

(4) 授業実践総括

表2に示したように、秋学期授業開始3回目より連弾のレッスンを開始した。個人の進度によってペアによる合同レッスンに移行するまでに多少の差異があったが、基本的に初めの2回を個人パートのレッスン、残り3回をペアによる合同レッスンとする見通しを定め実施した。レッスンは90分を人数で配分して行われ、自分の番以外の時間は1人につき1台ずつ与えられたクラビノーバを用いて練習をさせるという授業スタイルをとっている。連弾の学習期間中はペア同士で席に座り、協力し意見を出し合い、ときに教え合いながら練習に取り組んでいた。試験前には授業中のみならず空いている時間に練習をするペアが多く、連弾に対する意欲がうかがえた。指導計画としては、連弾学習開始1回目から2回目は個人パート毎に基本的な譜読み（音、テンポ、リズム等）の確認を行い、課題曲の譜読みを完了させることを目標とし、3回目から4回目ではペアでのレッスンに移行し、連弾特有の課題（呼吸を合わせる、相手の音を良く聴いて音量のバランス・テンポ・リズムを合わせる等）に留意し、ただの音の羅列に留まることなく積極的な音楽表現を加えることを目標とし実施した。5回目はリハーサル日として充てられ、試験の行われる音楽演習室にて、1クラス約20分ずつのリハーサル行い、その後レッスン室にてペアごとに課題の最終調整を行った。翌週の試験は学生にとって人前で演奏出来る貴重な発表の場となった。緊張する様子もうかがえたが、相手と呼吸を合わせる事や、お互いの音をよく聴き合うという点で、連弾による学習効果を感じさせる成長が見られた。また他のペアの演奏を聴くことによって個々の課題に気がつき、見直す機会ともなったようである。意欲的に取り組んでいるペアほど「もっと上手く弾きたい」という意欲が強くなり、演奏後に悔しさをにじませた学生が多かったのも印象的であった。今後選曲に際して、純正な連弾曲でなく特にポップスなど編曲された曲を扱う場合の楽譜選びは慎重に行い、教育的意図に合ったものを吟味し与えるよう注意したい。また学生の意見を尊重した選曲によって、モチベーションという面では良い効果を得られたが、学生同士の好みの一致という点だけでペアを振り分けて

表1

	授業日	内容
1	9月20日	夏休みの宿題の発表（ピアノソロ1曲、子どもの歌弾き歌い1曲）ソロ課題の選定
2	9月27日	連弾のペアと課題曲の選定、ソロ課題のレッスン
3	10月 4 日	ソロ課題と連弾の個人レッスン（1人あたり15分）
4	10月11日	連弾の個人レッスン＋アンサンブルレッスン、子どもの歌の合奏曲選定（2曲）
5	10月18日	連弾のアンサンブルレッスン（1組20分から25分）合奏練習
6	10月25日	連弾のアンサンブルレッスン（1組20分から25分）、合奏練習
7	11月 1 日	音楽演習室にてリハーサル、各レッスン室にて最終調整（連弾・子どもの歌の合奏）

表2：調査対象者の秋学期中間試験における連弾の曲目

作曲家／編曲者	曲名	使用教材
J. パッヘルベル	カノン	全音ピアノ連弾ピース
J. オッフェンバック	《天国と地獄》より 序曲	クラシック・ベスト・セレクション
アラン・メンケン	美女と野獣	発表会で弾きたい2人のTV&映画ヒッツ
久石譲	《ハウルの動く城》より 人生のメリーゴーランド	初級×中級両方主役の連弾レパートリースタジオジブリ名曲集
久石譲	《千と千尋の神隠し》より いつも何度でも	初級×中級両方主役の連弾レパートリースタジオジブリ名曲集
葉加瀬太郎	情熱大陸	初級×中級両方主役の連弾レパートリーテレビ＆シネマ名曲集
中島みゆき	糸	発表会で弾きたい2人の日本の名曲選

しまった事を反省点として挙げておく。学生のレベルのバランスを考慮したペア決めの重要性を認識したため、改善すべきであると考えている。

Ⅵ. まとめ

保育者の音楽表現技術は、保育の現場において子どもの音楽表現活動を支えるための大切な力のひとつとなる。音楽が子どもの成長に与える影響は計り知れず、子どもの手本となり、充実した人間性を育むための最初の音楽体験がより豊であるために、保育者は良い表現者でもある事が望ましい。良い表現者としての保育者を育むために、保育者養成校では音楽カリキュラムを最大限に活用し、学生に美しい音楽体験をさせることが、指導者として重要な責務であると考えている。そのような考えのもと、今回はピアノ授業における連弾の役割に焦点をあて考察を進めた。その結果、連弾は音楽的能力の育成のみならず音楽を通して相手に配慮する心や協調性を学べる点で大きな役割を果たす事を、改めて確認する事が出来た。筆者自身の理解を深め、指導の可能性について検討する良い機会にもなったので、今後はその成果を活かし授業に還元出来るよう努力していきたい。

参考文献

高木誠・稲葉順子・鈴木賀子・野村麻里・平野智美・和田淳一（2008)、「連弾の研究」―各教員の指導例から―、『千葉経済大学短期大学部研究紀要』4、109-121

若谷啓子（2013)、「養成校の音楽表現活動における協同的な学びについての一考察」―ペア連弾の有用性と課題―、『埼玉学園大学紀要』13、249-256

田中慈子（2015)、「保育者養成校における学習意欲を高める音楽の指導法」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』53、109-118

吉田めぐ（2017)、「ピアノ学習における連弾の可能性」―本学の授業実践を通して―『関東短期大学紀要』59、42-50

葛西健治・伊藤仁美・今川典子・多賀洋子・嶋田洋子・眞田千絵（2015)「保育者養成校における音楽授業科目に関する一考察（1)」―本学の初年次音楽教育カリキュラムの比較を通して―『こども教育宝仙大学紀要』6、1-10

葛西健治・伊藤仁美・今川典子・多賀洋子・嶋田洋子・眞田千絵・林英美子（2016)「保育者養成校における音楽授業科目に関する一考察（2)」―本学の1年次秋学期から2年次春学期までの器楽関連科目について―『こども教育宝仙大学紀要』7、13-24

葛西健治・伊藤仁美・今川典子・多賀洋子・嶋田洋子・眞田千絵（2017)「保育者養成校における音楽授業科目に関する一考察（3)」―本学の音楽カリキュラム総括と今後の課題について―『こども教育宝仙大学紀要』8、23-35

児玉邦夫・児玉幸子『ファミリーピアノのすすめ―連弾を楽しむ―』講談社、1989年

安田寛ほか『バイエル』原典探訪 ―知られざる自筆譜・初版譜の諸相― 音楽之友社、2016年

楽譜（使用教材）

『パッヘルベルのカノン』（全音ピアノ連弾ピース）全音楽譜出版社、1998年

『クラシック・ベスト・セレクション』ヤマハミュージックメディア、2016年

『発表会で弾きたい2人の日本の名曲選』シンコーミュージック、2014年

『発表会で弾きたい2人のTV&映画ヒッツ』シンコーミュージック、2015年

『初級×中級両方主役の連弾レパートリースタジオジブリ名曲集』ヤマハミュージックメディア、2014年

『初級×中級両方主役の連弾レパートリー』ヤマハミュージックメディア、2014年

注

1）高木・稲葉ほか（2008）p.109
2）若谷（2013）p.250
3）田中（2015）p.109
4）吉田（2017）p.43
5）『標準バイエルピアノ教則本』全音楽出版社
6）児玉邦夫・児玉幸子（1989）p.123
7）葛西・伊藤ほか（2015）p.3